



ジョンズ・ホプキンス大学の核医学 —ヘンリー・ワグナー先生を偲んで—

佐々木 康人

Sasaki Yasuhito

はじめに

核医学のパイオニアの一人、ジョンズ・ホプキンス大学名誉教授ヘンリー N. ワグナー二世（写真 1，表 1）が 2012 年 9 月 25 日に急性呼吸不全のため逝去された（享年 85 歳）。ワグナー先生の薫陶を受けた大勢の日本人核医学者をはじめ、世界中の核医学関係者に衝撃が走った。正に巨星墜つての感があった。筆者は、師と仰ぐ人の突然の悲報に驚き、強い喪失感を経験した。9 月 28 日にボルチモア市の聖心寺院（Shrine of the Sacred Heart）で行われた葬儀に

出席することはできなかったが、ボルチモア在住の先輩、故 東郷靖先生のご夫人が参列され、筆者の名代を名乗ってくださった。11 月 3 日にジョンズ・ホプキンス大学病院核医学部門主催の偲ぶ会（memorial service）に夫婦で参加して、弔辞を述べた。本年 6 月 8～13 日カナダのバンクーバーで開催される米国核医分子画像学会（SNMMI）年次大会では、生涯教育コースの 1 つで「ヘンリー・ワグナー追悼歴史セッション」が企画されている。核医学の父の足跡をたどり、核医学の科学的進歩、臨床分野として確立した経緯、核医学の基本原則を学ぶ。筆者も講師を依頼されている。

この機会にワグナー教授が主宰されたジョンズ・ホプキンス大学の核医学と日本の核医学との絆を、ワグナー先生を偲びながら筆者の思い出に基づいて振り返ってみたい。

1 絆のはじまり

ジョンズ・ホプキンス大学病院の核医学部門が創設間もない 1961 年に、一人の日本人医師が研究員としてワグナー先生の下で研究に従事することになった。東京大学医学部附属病院第二内科 上田英雄教授が派遣した飯尾正宏先生（後の東大放射線科教授、日本アイソトープ協



写真 1 ヘンリー N. ワグナー二世

表1 ヘンリー N. ワグナー二世の略歴

1926年	アメリカ合衆国メリーランド州ボルチモア市で誕生
1944年	カルバート・ホール高等学校卒業
1944～48年	アメリカ合衆国沿岸警備隊学院卒業
1948～52年	ジョンズ・ホプキンス大学, 医学部卒業
1952～53年	同病院で臨床研修 (インターン)
1953～54年	同病院で研修医 (レジデント)
1955～56年	国立公衆衛生院 [NIH] 臨床助手
1956～57年	英国ロンドン市ハマースミス病院特別ポスドク研究員
1958～59年	内科 (オスラー内科病棟) 主任研修医 (チーフレジデント)
1959年	内科兼放射線科助教授
1967年	医学部放射線科教授兼公衆衛生学部放射線科学教授
1976年	公衆衛生学部放射線健康科学部長兼務
1995年	医学部及び公衆衛生学部名誉教授
米国核医学会会長 (1970～71年), 世界核医学・生物学会議会長 (1975～78年)	
家族: ご夫人 Anne Barrett Wagner, お子さん Nick Wagner, Randy Wagner Rixey, Mark Wagner, Anne Wagner Speed, 9人のお孫さん	

会常務理事, 故人) であった。循環器内科のフェローを目指していたが, たまたま空きのあった核医学に籍を置いたと伺ったことがある。自ら被験者となって, ^{131}I -MAA の肺血流シンチグラムに初めて成功した。欧米人に多い肺塞栓症診断に以後多用された。帰国された飯尾先生は上田教授とともに日本核医学会の発展に尽力された。

飯尾先生を通じて日本人・日本文化・哲学に接し, 魅了されたワグナー教授は, 日本人の良き理解者となり, 筆者を含む多くの日本人を養成し, 日本の核医学発展に多大な貢献をされた。初めて来日し, 飯尾先生の案内で各地を旅行された時の様子を写真2に示す。上田教授は, 飯尾先生の後任として右田徹先生 (現 右田病院理事長), その後, 開原成允先生 (後の東大病院医療情報部教授, 故人) をワグナー先生の下に送り, ホプキンスの核医学発展の一翼を担った。心電図同期 RI 心血管イメージングをコンピュータ解析し, “機能図 (functional imaging)” と命名したのは開原先生であった。ジゴキシンの放射免疫測定 (RIA) の開発も開原先生の業績である。

1966年の米国核医学会年次総会出席後, ワグナー先生と飯尾先生は揃ってウエストヴァー



写真2 東京大学 赤門の前で

ジニア大学に A. A. Abt (アプト) と S. L. von Sehuching (フォン・シューチング) 博士を訪問した。両博士の開発した簡易な呼気中炭酸ガス捕集装置を見学し, ^{14}C 呼気テストのアイデアをボルチモアと東京に持ち帰った。東大第二内科で筆者は飯尾先生のスケッチを基に呼気中炭酸ガス捕集装置を試作し, ^{14}C ラクトースを使って乳糖不耐症の診断に応用した。ホプキンスでは開原先生が使い捨て式呼気捕集装置を作成し, ^{14}C -パルミテートを用いて脂肪吸収試験に応用した。

2 ホプキンズの臨床核医学 1969～71 年

1968年12月30日、筆者は家内と1歳8か月の長男を連れてボルチモアフレンドシップ空港に降り立った。出迎えの開原先生が運転するフォルクスワーゲンビートルの窓から見る冬の街は灰色にくすみ、旅の途中で立ち寄ったサンフランシスコやロサンゼルスのもう一つの魅力はなかった。その分色彩豊かな世界に一変する春の訪れに感激した。開原先生が用意してくださった家具付アパートにとりあえず入居して、米国での生活が始まった。飯尾 (Iio=110) 先生が Agent No.110 from Japan と呼ばれたことから、4番目の筆者は No.113 と呼ばれている。右田先生は No.111、開原先生は No.112 であったことになる。ワグナー先生はこの冗談がお気に召していて、筆者はしばしば Agent No.113 と紹介され、そのいわれの説明を求められた。

日常の核医学診療は、病院で数台のシンチスキャナーを用いて実施されていた。毎日20～30症例の検査があり、当番医はすべての患者の病歴を読み、必要に応じて患者の診察をした。撮像は各部屋担当の技師が行い、現像した写真を当番医がチェックしてOKが出てから患者は退出する。夕方になると検査を依頼したレジデントやインターンが結果を聞きに来る。当番医が所見と解釈を述べ、議論する。時に挑戦的に見える依頼医師との議論は、ストレスではあったがよい勉強になった。このころは全症例をシャオカステンに掛け、翌朝のカンファランスに備えた。カンファランスでは、前々日の当番医がまず画像だけを見て読影する。次いで前日の当番医が患者の情報を提供し、再度画像の解釈をする。出席者から多くの議論が出されるが、最後はワグナー先生の判断で結論が出る。当番医が前日依頼医に述べた解釈と公式のレポートの解釈が異なる場合には、依頼医に電話をしてレポートにどのように書くかを知らせ、自分の解釈との違いを言い訳することになる。「自分は今でも正しいと思うが、ボスの意見は

違うので報告書はボスの意見に従って書く」という場面もしばしばあった。

フェローが溜飲を下げる場面もある。問題症例や興味深い症例を選んで経過を追跡し、毎日数例が供覧される。この時はワグナー先生が画像だけ見て所見と解釈を述べる。その後、フェローがフォローアップの結果を披露する。ワグナー先生が間違える場面では密かにニタリとできることになる。教授は間違えてはいけないという先入感がある日本とは異なる自由な討議の場を、時を追うごとに楽しむことができるようになった。

モーニングカンファランスは核医学診療の核心的存在で、外部から多くの訪問者が招かれて出席した。ある時、銃創を受けた患者の検査が続いた後、ヨーロッパから来ていた見学者が「さすがにホプキンズですね。ベトナム戦争で負傷した患者がこちらで検査を受けているのですか?」と発言した。「ボルチモアでは毎日ベトナム戦争で負傷する人より多くの方が銃で撃たれているのです」という答えに苦笑したものである。実際、銃創の略語 GSW (gun-shot wounds) は病歴の中でしばしば見られた。

初めての当番医を務めるに当たり、音声入力による報告書作成に当惑した。ディクタフォン(カセットテープ録音機)を使うのも初体験であった。最初は手書きという筆をいさめたのは開原先生の弟子に当たるウィリアム・シュトラウス(後のハーバード大学教授、現スロンケタリングがんセンター)であった。「音声入力は手書きよりはるかに効率が良い。慣れるまでは時間がかかるが漸次効率が上がるので、最初からディクテーション(音声吹き込み)を勧める」との助言に従って正解であった。当初は苦勞し、時間もかかったがすぐに慣れて、トランスクリイバー(文章に起こす人)から「あなたの報告書は明快で早口でないで、タイプがとてもしやすい」と言われるようになった。帰国後、聖マリアンナ医科大学での同方式による報告書作成も熟練者として実施できた。

1970年の夏休みに奨学金をもらい、ボストンのマサチューセッツ工科大学（MIT）で行われた2週間の核医学トレーニングコースに参加したことがある。「ワグナーのところにいる」と言うと「ヘンリーと一緒に働きたいが、ボルチモアには住みたくない」という答えが返ってくるほど、ボルチモアは治安の悪い街として有名であった。しかし、郊外の住宅地は安全で美しく、街の中央を南北に走るノースチャールズ通りを北上しグレートボルチモア病院の門を通過する辺りの緑溢れる景色は胸を締め付けられるほど懐かしく思い出される。前述の東郷先生の瀟洒なお宅がこの先にあり、貧乏な留学生にとって、砂漠のオアシスのような憩いと新たな活力をいただいたこともある。MITの講習会では出席者の多くが筆者のところにきて「ヘンリーは今何をしているのか？ 何か新しいことをしているか？」と異口同音に質問してきた。皆の関心の的である最先端の核医学に自分が日夜接していることを、病院の外に出て初めて実感した。

当時は既にガンマカメラが市販され、スキャナーからカメラへ、 ^{131}I 標識から $^{99\text{m}}\text{Tc}$ 標識へ変わりつつあったが、ワグナー先生はまだスキャナー派で、脳、肺血流、肝臓スキャンなどの日常検査はフォトシンチグラムで撮像されていた。カメラは心臓のRIアンジオに専ら用いられ、コンピュータ解析班は夜を徹して働き朝のカンファレンスにデータを間に合わせていた。 $^{87\text{m}}\text{Sr}$ による骨シンチや ^{67}Ga による腫瘍、炎症シンチも実施されたが、画質は決して満足できるものではなかった。カメラ中心の核医学施設に生まれ変わるのはこの2~3年後である。

3 研究活動 1969~71年

日本流に言えば、この当時のワグナー研究室はスタッフ、フェロー、レジデント（放射線科や内科からの短期ローテーション）に技術員を加えても総勢40人ぐらいであった（写真3）。



写真3 ワグナー研究室のメンバー（1970年）

研究員（research fellow）は北米、南米、ヨーロッパ、アジア、オセアニアから集まり、極めて国際色豊かであった。多彩な人材が揃い、その後も長い付き合いをする友人ができた。週2回程度の病院当番と2週に1回ほど回ってくる夜間オン・コールの臨床duty以外は研究活動に従事した。多くの研究員は臨床データを集めて、シンチグラフィの新しい所見や解釈を研究テーマにしていた。筆者から見れば手を汚さないきれいな仕事であった。筆者は開原先生がイヌで行った実験を引き継ぎ、標識マイクロスフェアを用いた心拍出量の臓器分布測定をラットに応用したのを皮切りに、日本で始めた ^{14}C ラクトース呼気テストや ^{14}C コリルグリシン呼気テストによる腸管内細菌による胆汁酸脱抱合の診断、学位論文に用いたカテーテル型半導体放射線検出器によるイヌの局所心筋血流量測定、鼻粘膜繊毛運動の測定などと取り組んだ。テーマごとに有能な技術員（technician）が付くので効率良く研究を進めることができた。技術員のない午後5時半以降や週末には実験ができなかったので、家族と過ごす時間を十分に取ることができた。

呼気テストでは消化器グループと、半導体検出器の応用では循環器グループと、鼻粘膜繊毛運動では耳鼻科と共同研究をした。ラットを長時間泳がすことができる装置を精神科の研究室で使わせてもらったり、メリーランド大学が管

理する刑務所 (Maryland House of Correction) で志願した囚人を測定したり、ニューヨーク州のブルックヘブン国立研究所と共同研究するなど、活動範囲は次第に広まり、忙しく動き回るようになった。1年余経たころ、臨床の duty を免じて欲しいと申し出た。ワグナー先生からは「臨床の場から得るものが頂点に達したと自分で思えるのなら、研究に専念してもよい」と言われたため、更に数か月臨床の勉強をした後、免除してもらった。詳しく述べる紙面の余裕はないが、この研究活動を通じて、競争の厳しさとその公正さを体験した。学会発表の予行演習は昼食をとりながら行われた。細部まで、多くの批判や意見が述べられる。特にワグナー先生の指摘は厳しかった。米国核医学会 (Society of Nuclear Medicine : SNM) で発表した論文「簡易な呼気テストによる胆汁酸脱抱合の検出」の予行演習は、6回修正した後7回目にやっと合格した。この論文は後に *New England Journal of Medicine* 誌に掲載された。

4 世界核医学会

世界核医学生物学会連合 (World Federation of Nuclear Medicine and Biology : WFNMB) 構想はカナダモントリオール大学の J. スタンバーグ教授の先導で進められ、1971年の秋に第1回学術大会 (World Congress of Nuclear Medicine and Biology : WCNMB) をモントリオールで開催することが決まっていた。筆者はこの学会に是非参加してから帰国したいと要望し、1970年末に2年間の留学期間の延長を願い出て、東大医局の了解を得ていた。ワグナー先生に延長をお願いすると、「東大が了解し、奥さんが良いなら、いつまでいても良い」との返事をいただいた。嬉しかったし、「奥さんが良いなら——」が新鮮であった。もとより家内に異存はなかった。最後の8か月は最も楽しい時期となった。

1971年3月ごろであったか、メキシコ市で開催されたラテンアメリカ核医学生物学会議

(ALASBIMN) で、ケベック州の独立運動による政情不安定のため、モントリオールでの世界核医学会開催が中止された。急遽開催場所と会長の選出が行われ、1974年に上田英雄会長、飯尾正宏事務局長、加藤貞武財務委員長の下で、東京で開催することが決まった。このニュースはワグナー先生の代理で会議に出席していた同期の研究員、ペルー出身のパブロ・ディボスからもたらされた。その後、日本との連絡係を筆者が務め、1971年9月に帰国後、事務局の手伝いをするようになった。

1974年10月5日に品川パシフィックホテルで皇太子ご夫妻をお招きして開会された第1回世界核医学会は、最終日は京都に移動し、10月8日に鳥塚莞爾教授主催のお別れ会で幕を閉じた (写真4)。教室員の家族友人、関係企業社員が力を合わせて準備、運営するいわば手作りの国際学会であった。参加者は、今でも良い思い出となったと懐かしく振り返る。ワグナー先生は後に「日本は資金基盤の定かでない中、大変なリスクを負いながら果敢に挑戦した。第1回世界核医学会の成功がその後の核医学の発展を約束した」と述べておられる。1978年にワグナー会長の下、ワシントン DC で第2回会議、以後4年ごとにパリ、ブエノスアイレス、モントリオール、シドニー、ベルリン、サンチャゴ、ソウル、そして第10回大会が2010年ケ



写真4 開会式に出席された皇太子ご夫妻 (1974年) と各国代表
一番手前がワグナー先生

ープタウンで開催された。初めてのアフリカ大陸、初めての女性会長の下での開催であった。開会式と閉会式では日本が寄付した鐘を鳴らすのが恒例である。この鐘には“世界絶対平和を願う”と刻まれている。飯尾先生逝去の後、ワグナー先生の提案で始められた“Masahiro Iio Award”が若い研究者に贈られた。

第1回世界核医学会会期中に上田会長の提案で結成されたアジアオセアニア核医学生物学連合(AOFSNB)も、1976年の第1回学術大会(AOCSNB)(シドニー)以降4年ごとに開催され、第10回大会が2012年にテヘランで開催された。



写真5 東京でのワグナー同窓会(1992年)



写真6 小須田会長とワグナー夫妻(2011年)

5 日本のワグナー会

ワグナー先生が主宰するジョンズ・ホプキンス大学核医学部門には、世界中から若い医者や研究者が集まり、修練を受けた。ある年には、世界中の核医学会会長10人がホプキンス核医学部門出身者であったこともある。中でも日本からの留学生は多く、約60人に及ぶ。それぞれ日本の核医学発展に貢献している。

筆者らは、ワグナー先生が来日される機会に、ワグナー同窓会(写真5)を開催している。越智宏暢先生が会長を務め、日本メジフィジックス(株)の協力を得て名簿を管理し、会の計画、運営を担っておられる。2011年10月につくば市で開催された日本核医学会学術総会、日本核医学技術総会学術大会に小須田茂会長の招待で参加されたワグナー夫妻(写真6)を迎えて開催したワグナー会が最後となった。筆者は外国出張中で参加できなかったが、帰国翌日、学会最終日につくば市で昼食を共にした。これがワグナー先生にお目にかかる最後の機会となることは知る由もなかった(写真7)。

日本メジフィジックス(株)の後援で鳥塚-ワグナーファンドがSNMMIに貢献しているのも、このような定期的交流が寄与したかもしれないと想像している。



写真7 つくばでの昼食会後(2011年)

6 日本への関心

飯尾先生の紹介で日本の地勢、文化、芸術、哲学に触れたワグナー先生は日本への親近感を強く持たれたのだと思う。数多くの日本人がワグナー門下生として核医学の修練を受けたのも、診療、研究のレベルの高さに加えて、ワグナー先生の日本人への理解の深さが日本人を引き付けたと思われる。

ジョンズ・ホプキンス核医学同窓会で中心的役割を果たしていた、アフリカ系アメリカ人のR.ホルム先生（ミシシッピ大学教授）と肩を並べて学会場へ向かっている時、突然に「ヘンリーには favorite children がいる。お前もその一人だと我々同窓生はみなしている」と言いだし、面映ゆく、答えに窮した記憶がある。SNM 年次総会の折に毎年開かれるホプキンス核医学同窓会では“卓抜した同窓生賞”が授与されていた。ホルム教授がユーモアたっぷりの司会をして、参会者を笑いの渦に巻き込むのが常であった。筆者が1976年に受賞した時には司会者が「お前にはやりたくない」と繰り返すのを「何が何でも欲しい」と言って盾を奪い取った覚えがある。同窓会では価値の高い賞なのである。

飯尾先生が初めて日本を案内して以来、ワグナー夫妻は数限りなく訪日し、日本の生活習慣や文化に精通しておられた。筆者が留学に先立って面接を受けたのも赤坂にある純日本旅館に宿泊しておられるワグナー先生を右田先生（Agent No.111）に付き添われて訪問した時であった。緊張しながら歓談しているうちに「小原庄助さんは、何で身上つぶした？ 朝寝、朝酒、朝湯が大好きで、それで身上つぶした」という歌を説明する仕儀となった。緊張と英語の会話のためか、朝寝、朝酒の後がどうしても出てこない。すかさずワグナー先生は“morning sex”であろうと言われ、そうではないと懸命に弁明するのだが、最後まで“朝湯”が出てこず、ワグナー先生は誤解されているのではない

かと今でも気に掛かっている。

日本の風呂は大変お気に召していた。筆者が留学中にチェサピック湾を挟んでボルチモアの対岸に当たるイースタンショアに土地を購入し、別荘を建てられた。整地の段階からしばしば招かれて訪問した。トラクターを運転して自ら整地に励むワグナー先生に出会ったこともある。いよいよ家が建つ段階で教授室に呼ばれた。「浴室は和風にしたい。アン夫人と一緒に入れる大きさの木製の日本の湯船を入手して欲しい」との要望にはたと頭を抱えてしまった。日本の家庭でも木製の風呂桶を使ったのは子供のころの記憶にしかなかった。それでも、実家と連絡をとったり、ニューヨークに(株)東芝の科学アタッシェとして赴任していた半導体検出器の共同研究者 高柳誠一氏（後の(株)東芝 副社長）に相談したが入手の手立はたまたなかった。「八方手を尽くしたが入手は難しい。仮に入手しても輸送に大変な費用がかかる」という説明に、「日本からの留学生在湯船に荷物を積めて送れば費用は掛からないはずだ」と言われ困惑した。あきらめていただくのにかかり時間がかかったように思う。別荘ができてから招かれた。チェスター川の河畔の広い敷地に建つ立派な建物であった。確かに幾分アジアンテイストだったが、和風建築とは言えなかった。ただし、浴室は和風で“すのこ”がしかれ、大きなボール型の浴槽が置かれていた。五右衛門風呂の変形と言えなくもないが、材料はプラスチックではなかったか。この風呂を最初に使ったのは飯尾先生であったと聞いたことがある。がん研究で短期間ボルチモアに来ていた同級生 江川滉二君を連れて行って、鴨狩に使う水辺の狩猟小屋に泊めていただいたこともある。

その後、ワグナー先生の娘さん一家が住むハワイのマウイ島にも別荘を建てられ、特にホプキンス引退後は年間2~3か月を過ごしておられた。「君への招待状は常に生きている」とおっしゃっていただき、何度も誘われたが果たせず、そろそろ訪問の計画を立てようとしていた

ときの訃報であった。小川弘（(株)第一ラジオアイソトープ研究所 元 常務取締役）ご夫妻はしばしば訪れ、2012年夏にも1週間滞在された。

その小川氏から、「ワグナー先生から日本の核医学の歴史を書きたいので手伝う人を探してくれと頼まれたので、筆者を推薦してあるのでもよろしく頼む」と言われていた。“書く人ごとに少しずつ異なる歴史がある”ので筆者が手伝えれば当然批判や反論もあるであろうと逡巡していたが、そろそろワグナー先生のアイデアを聞きたいと思い始めていた矢先であった。ワグナー先生なら、“Personal history of Nuclear Medicine in Japan”を書く材料をたくさん持つていらっしやっただと考えると残念であり忸怩たるものがある。

7 リーダーシップ

内科医としての修練を受け、腎疾患に関心のあったワグナー先生が、ジョンズ・ホプキンス大学核医学を先導して、脳、肝臓、肺、腎、心血管等各種臓器の機能画像診断を推進しておられた1960年代、核医学は小内科学であるとよく言われた。特に肺塞栓症の診断と治療には力をそそいだ。X線CTの開発で脳シンチグラフィが激減して核医学の将来を悲観的に予想する人々の多い中で、ワグナー先生の信念は揺るがなかった。常に輝かしい未来を見据えて核医学の発展の先頭を切ってきた。TI-201の導入で、脳に代わって心臓核医学が目覚ましく発展した1970年代の先端を走り、1980年代にはPETで脳の受容体画像化に初めて成功し、脳PETを躍進させた。人体の生理機能を測ることから始まった核医学は人体の代謝、生化学を画像化し、とりわけ脳の化学反応を知ることが脳精神疾患の診断と治療に大きな転換をもたらすことを予想した。「一人ひとりに遺伝子型、表現型があるように、個人の脳の化学変化を判別できるかもしれない」「今日、新しい医学技術、と

りわけPET像は、人間の精神に深く組み込まれたおそれ、残虐性、凶暴性についての理解を深めることができる。もし、脳の化学反応を、ある種の正常及び異常行動と関連付けられれば、核兵器のみならず通常兵器の脅威をも軽減することが可能になるかもしれない」というワグナー先生の考えに共鳴した、浜松ホトニクス(株)の晝馬輝夫社長(当時)とワグナー先生を中心に“脳・心と国際平和の国際会議”を2年に1度、浜松で開催してきた。世界各地から卓抜した脳科学者、精神科医、画像医学者を招いて会議が重ねられてきた。一方で中国の核医学発展に意欲を燃やし、C-11メチルスピペロンの線条体結合を計測するポジトロン測定装置を開発して、核聴診器と呼んだ(写真8)。

「核医学は分子医学である」と言われ始めたのは1990年代に入ってからであろうか？化学型(chemotype)を明らかにする核医学は遺伝子型(genotype)と表現型(phenotype)の橋渡しをすると説いた。この考えは分子画像(molecular imaging)へとつながり、核医学会は核医学分子画像学会と改称するに至った。

米国核医学会年次学術大会の最終日を飾るワグナー先生のハイライト講演は圧巻であった。学会のまとめ以上に学会の将来像を示すワグナー哲学が聴衆を魅了した。講演に取り上げる候補として、スライド2~3枚の提供依頼が届い



写真8 核聴診器を持つワグナー先生の肖像画。ジョンズ・ホプキンス大学病院核医学部門入り口に掲げられている(セドリック・イゲリ作)

た演者は期待に胸をふくらませた。実際に取り上げられると誇らしい思いをした。今年の画像 (the image of the year) に選ばれたならば小躍りしたであろう。高齢に至るまで、25年にわたって続けられたのは脅威である。この種のハイライト講演は様々な学会で行われるようになったが、専門分野別に分担することが多く、すべてを一人で網羅して聴衆を引き付ける講演者は二度と現れないのではないかと感じる。日本語への翻訳は米倉義晴先生が担当しておられた。

8 ジョーンズ・ホプキンスの核医学 2008～12年

1995年に退任し、医学部と公衆衛生学の名誉教授となった後にワグナー先生の名前を頂く核医学教授職、the Henry N. Wagner, Jr. Professorship in Nuclear Medicine が誕生し、初代の教授としてリチャード・ワール先生が就任した。筆者は2008年と2012年に短時間訪問し、昔懐かしい昼食セミナーで講演した。病院の敷地は著しく拡張され、近年新しい外来棟と病院棟が立ち並び、核医学施設、設備も一新され、昔日の面影はほとんどない。1876年創立以来、大きなキリスト像の立つ玄関ホールは昔のまま保存されている。

ジョーンズ・ホプキンス大学自体はアジアへ目を向け始め、同窓会にアジア担当者が任命され、トレーバ・ロー氏が就任し、アジア諸国の同窓生を訪ね歩いている。ワグナー先生逝去後の弔意の表し方や葬儀、追悼行事について同氏から情報を提供していただいた。

9 追悼

2012年11月3日にジョーンズ・ホプキンス大学病院の新築病棟内で核医学部門主催のワグナー先生を偲ぶ会が持たれた。小川弘夫妻とともに夫婦で出席した。宗教色は全くなく、筆者を

含む16人がそれぞれの思い出を語った。追悼した16人のうち10人は旧知の人々であった。追悼の後の昼食会でワグナー先生のご兄弟姉妹とその子供さんたちに初めて会い、言葉を交わした。その後アン夫人に誘われて長女ランディさんが運転する車でワグナー家を訪れた。筆者たちの知るワグナー家の隣家が売りに出て、そのままではいわゆるミニ開発が行われる可能性が高いため、市の依頼もあり、歴史のある家屋と環境保全の目的で購入したことを知った。築80年を経た広大な屋敷の内装修復を夫妻の思いを込めて終え、これから外装にかかるころだった。地下室にはワグナー先生の書類が山積みなのだそう。新装された各部屋を見せていただいた。最上階は建築当時紳士のプレイルームだったそうで、友人たちとの楽しい語りなど余生に多くの計画を残しての急逝であった。病状については心疾患に合併した急性呼吸不全と伺っている。

夜には同期のフェローや技術員が集まって会食した。40年の時間経過を超えて楽しい一時を過ごした。「法事は生存者が死者のために行うのではなく、死者の働きで生存者を一堂に集め、絆を深めるものだ」という寺の住職の講和を想起した。

筆者が東大を退任し、放医研へ異動することを報告した手紙への返信で、祝意と激励の手紙の最後が“You and I are very fortunate men”と結ばれていたことを思い出した。

ワグナー先生、長い間ご指導ありがとうございました。安らかに休息ください。

参考文献

- 1) Henry, N. Wagner, Jr., A Personal History of Nuclear Medicine, Springer (2006)
- 2) 佐々木康人監訳、館野円訳 (Henry, N. Wagner, Jr., and Linda, E. Ketcham 著) 放射線との共生, ユリシス・出版部 (1993)

(湘南鎌倉総合病院附属 臨床研究センター)